

# 陸軍・少飛平和祈念館

## 「多摩・戦争と復興の資料館」の構想

### (1) 少飛

皆さん「少飛」という言葉をご存じですか？

少飛は、少年飛行兵の略です。

第二次世界大戦、太平洋戦争では、戦闘機による戦いが重要な役割を果たしていました。戦闘機に搭乗する多くの飛行兵の育成が必要で、日本海軍は海軍兵学校等の他、飛行予科練習生(通称「予科練」)を、日本陸軍は航空士官学校等の他、少年飛行兵(通称「少飛」)を、全国から多くの志願者を募って育成しました。戦争末期には、陸軍の知覧出撃基地や海軍の鹿屋出撃基地などから沖縄方面に出撃した特別攻撃隊(通称「特攻」)は、こうした若い飛行兵達が主力となっていました。



「知覧特攻  
平和会館」

鹿児島県  
南九州市

### (2) 東京陸軍少年飛行兵学校

太平洋戦争時、東京の多摩地域は「帝都東京」を防衛する日本陸軍の重要な軍事拠点になっていました。

特に立川周辺は、陸軍立川飛行場(現在の昭和記念公園とその周辺地域)、陸軍多摩飛行場(現在の米軍横田飛行場)をはじめ、航空戦を支える陸軍航空本部、航空工廠(工場)、航空審査本部(試作機のテストと訓練)、航空技術研究所、高射砲陣地等多くの軍事施設があり、戦闘機や航空エンジン等を製造する軍需工場がありました。

東京陸軍少年飛行兵学校は、立川周辺に集中する軍事施設の一つでした。年齢が14・15歳から17歳、高等小学校卒程度の少年を全国から公募し、多数の応募者の中から選抜しました。基礎知識や軍事教練を1年間学んだ後、大刀洗・熊谷など操縦・整備・通信の各上級学校に別れて、実技訓練を行いました。東京本校の他、関西に大津少年飛行兵学校、九州に大分少年飛行兵学校があり、卒業生は総計約4万4千人、4千5百人が戦死し、その1割が特別攻撃隊に参加したとされています(\*1)。



子犬を抱いた有名な写真の少年飛行兵ですが、昭和19年8月に大刀洗陸軍飛行学校を少飛15期として卒業し、昭和20年5月に初めて出撃したのが特別攻撃隊でした。17歳2か月の短い命でした(\*2)。知覧は、当初は大刀洗陸軍飛行学校の分教場でしたが、戦況が緊迫した戦争末期に特攻出撃基地になりました。知覧特攻平和会館には、沖縄戦の「特攻」で戦死した1036名の御霊の灯籠が献げられていますが、陸軍少年飛行兵学校卒業生の特攻戦死者の数は、その半数近くの数となります(\*3)。

## (2) 海軍予科飛行練習生

特別攻撃隊で散った若い飛行兵としては、海軍予科飛行練習生(通称「予科練」)が有名で、予科飛行練習生が訓練を受けた茨城県の霞ヶ浦海軍航空隊の跡地には「予科練平和記念館」が設立されています。小中高校生も多数訪れ、戦時中の苦難と今日の平和の尊さを学ぶ、貴重な機会となっています。また、陸軍の「知覧特攻平和会館」と並ぶ、海軍の特攻出撃基地であった鹿屋には、海上自衛隊「鹿屋航空基地資料館」が設けられています。

「予科練平和記念館」茨城県阿見町霞ヶ浦



海軍零式艦上戦闘機(ゼロ戦)・左  
予科練平和記念館に学ぶ中学生



#### (4) 「陸軍・少飛」出身者の思いを語り継ぐ

陸軍士官や少年飛行兵出身者等の特別攻撃隊は、海軍士官や予科飛行練習生出身者等による特別攻撃隊と並んで使命を果たしました。

陸海軍の航空機による特別攻撃隊の戦死者約4千名のうち、約1千4百名が陸軍で、全体の4割近くを占めています(\*4)。戦争末期には飛行兵の早期育成のため基礎訓練を短期化または省略して上級学校に進みましたが、練習機や燃料が不足し、僅かな実技経験のみで戦場に投入された少年飛行兵も少なくありませんでした。また米軍の本土接近と上陸に備え、爆弾を抱え、命を懸けて突撃することを決意していた少年飛行兵も数多く存在していました。

「少飛〇期」、陸軍少年飛行兵学校出身者は、自らをこう称します。

昭和20年の「少飛20期」が最後の卒業生ですが、既に90歳近くの高齢者になっています。全国各地の少飛出身者はこれまで、同期会等で記録を出版し、情報を交換し合い、手記を発表するなどしてきました。年々生存者が少なくなっていく中で、少飛出身者の体験を証言ビデオとして収録するなど、少飛出身者の思いを記録し語り継ぐ対策が急がれています。



陸軍の主力戦闘機「隼」

東京では、これまで少飛出身者自らが、空襲で死んだ仲間の「慰霊碑・少飛の塔」を建立し、東京陸軍少年飛行兵学校跡地に「陸軍少年飛行兵揺籃の地」の石碑を建て、「予科練のような資料館」を要望して活動をしてきました。その一部は武蔵村山市の歴史民俗資料館分館として結実しています。

全国の少飛出身者の思いを受けとめ、少年飛行兵が果たした役割を後世に語り継ぐためには、陸軍少年飛行兵学校の本校が東京に存在した意味を歴史に留め、全国にピーアールすることが必要です。

個人や団体、関係企業、東京都、多摩自治体などが幅広く協力し「陸軍・少飛平和祈念館(多摩・戦争と復興の資料館)」を設立していくことが望まれます。

## (5) 多摩・戦争と復興の資料館

陸軍・少飛平和祈念館は「多摩・戦争と復興の資料館」の性格を併せ持ちます。東京陸軍少年飛行兵学校は、多摩地域に存在した貴重な戦争遺跡の一つですが、他にも、将来の子供たちに語り継ぐべき大切な戦争遺跡が数多くあります。昭和記念公園(陸軍立川飛行場)



立川駅北口に広がる昭和記念公園や公共施設群等の市街地は、陸軍の立川飛行場、航空本部、航空技術研究所等の軍事施設や戦闘機や航空エンジン等を製造した民間工場等の跡地利用が骨格になっています。

多摩地域は1930年代(昭和初期)、軍需品を製造する多くの機械工業の流入によって大きく変貌しました。戦時中、多摩地域の軍需工場は、軍用機と航空用発動機、計器・通信機器、中型戦車と軍用車両、小銃・機関銃・機関砲・高射砲、距離測定機、軍用時計などを生産し、戦争遂行を支えました。

代表的な中島飛行機製作所、石川島 武蔵野市陸上競技場(中島飛行機製作所跡)飛行機製作所、日立航空機株式会社、昭和飛行機株式会社、株式会社日本精鋼所、東京芝浦電気、日野重工業株式会社等々の工場は、関連会社を伴って何万人もの従業員で操業され、農村社会を一変させました(\*5)。陸軍の中核施設は立川周辺に集中しましたが、他の軍事施設と軍需工場は、多摩全域に広く点在し、戦争遂行の重要な役割を果たしました。戦後も多摩地域の産業の重要な一角を占め、また不要となった広大な用地は、都営住宅、都市公園、市庁舎等公共施設、大学用地等の都市施設に転用され、各自治体の市街地形成と発展に大きな役割を果たしています。



戦争末期の米軍による空襲によって、多摩各地に大きな被害があったことも語り継がなければなりません(\*6)。軍事拠点となっていた多摩地域は、当初から米軍の重要な爆撃目標になっており、激しい空襲を受けました。昭和20年3月10日の東京大空襲がよく知られていますが、多摩地域に襲来し

たB29米軍爆撃機数や投下された焼夷弾の量は、東京大空襲に比肩すると  
言われています(\*7)。

「陸軍・少飛平和祈念館」は、多摩・戦争と復興の資料館として、多摩地域  
が太平洋戦争で果たした役割を再認識し、子供達と一緒に、多摩地域がどの  
ように変化し、形成され、発展してきたかを理解するとともに、首都東京の  
一翼を担う多摩地域の現状と今後の発展を考える施設とします。

## (6) 施設内容 (案)

展示等の内容は、以下のようなことを想定しています。

### ① 東京陸軍少年飛行兵学校

- \*少年飛行兵学校の遺品、生活・訓練の様子、熊谷・大刀洗等上級学校の訓練、グライダー訓練、少年飛行兵制度の変遷と解説、海軍予科訓練生との違い
- \*個々の少年飛行兵出身者の体験口述(ビデオ)、記録、手記等
- \*「少飛出身者」「特攻兵」の遺品、資料、映像記録
- \*陸軍主力戦闘機「隼」の展示

### ② 太平洋戦争終戦時の立川周辺 (ジオラマ都市模型)

### ③ 多摩地域にあった軍事施設の概要と歴史、跡地利用 (主要な例)

- \*陸軍立川飛行場・航空本部・航空整備学校・航空審査本部・航空技術研究所 (立川市)
- \*陸軍多摩飛行場 (福生市)
- \*陸軍航空工廠 (昭島市)
- \*東京陸軍少年飛行兵学校・陸軍病院・高射砲陣地(武蔵村山市)
- \*陸軍兵器補給廠小平分廠・傷病軍人武蔵療養所 (小平市)
- \*陸軍師団司令部、陸軍病院、陸軍予備士官学校、陸軍練兵場(久留米市)
- \*東京陸軍少年通信兵学校 (東村山市)
- \*陸軍燃料廠 (府中市)
- \*陸軍技術研究所 (小金井市)
- \*陸軍造兵廠多摩火薬製造所 (稲城市)
- \*陸軍調布飛行場・中央航空研究所 (調布市)

### ④ 戦時体制と多摩の大学 (主要な例)

- \*国際基督教大学、東京学芸大学、成蹊大学、旧東京商科大学、東京経済大学等

### ⑤ 昭和初期の多摩機械工業(軍需工場)の興隆と歴史、跡地利用 (主要な例)

- \* 中島飛行機武蔵製作所・横河電機製作所（武蔵野市）
- \* 日本無線電信電話株式会社、中島飛行機三鷹工場（三鷹市）
- \* 帝国ミシン小金井工場（小金井市）
- \* 中央工業南部銃製作所・日立中央研究所（国分寺市）
- \* 東京重機製造工業（調布市、狛江市）
- \* 石川島飛行機製作所（立川市）
- \* 昭和飛行機株式会社（昭島市）
- \* 東京瓦斯電気立川工場（東大和市）
- \* 小西六写真工業・富士電機豊田工場・日野重工業（日野市）
- \* 日本精鋼所武蔵製作所・東京芝浦電気府中工場（府中市）

⑥ 展示室、映像室等（例）

- \* 少年飛行兵展示室、「隼」展示室、「特攻」映像室、講話室（語り部室）、  
立川周辺終戦時の都市模型展示室、資料室、休憩室
- \* 多摩機械工業（軍需工場）の興隆と今日の状況展示室
- \* 今日の多摩地域産業の特色と将来の展望

（註）

- (\*1) 出典：檜崎由美「武蔵村山市に設置された主な陸軍軍事施設について」武蔵村山歴史民俗資料館報「資料館だより第58号」2017.3.31.14頁。
- (\*2) 出典：同上
- (\*3) 出典：知覧平和記念館HP、資料
- (\*4) 航空機による特攻の未帰還兵は、海軍2517名又は2525名、陸軍1440名又は1388名の数字がある（西川吉光「特攻と日本人の戦争」・特攻隊慰霊顕彰会等）が、概数では総計約4000名、海軍2500名強、陸軍1400名前後と考えられる。
- (\*5) 「主な軍事施設」：飛行場（立川、多摩、調布）、陸軍航空本部、航空工廠、航空技術研究所、航空審査本部、航空廠、造兵廠多摩火薬製造所、陸軍気象部、少年飛行兵学校、高射砲第七連隊、陸軍病院など  
「主な軍需工場」：石川島飛行機製作所（立川飛行機）、昭和飛行機、東京瓦斯電気（日立航空機）、中島飛行機製作所（富士重工業）、横河電気、日本無線、帝国ミシン（蛇の目ミシン）、小西六写真工業、富士電機、日野重工業、東京芝浦電気など（出典：総務省HP、星野朗「昭和初期における多摩地域の工業化」駿台史学第105号、小平市立図書館）
- (\*6) 多摩地域の空襲の例：武蔵野市（1944.11.24～1945.8.8、9回）、立川市（1945.2.17～8.2、13回）、三鷹市（1945.2～7、7回）、八王子市（1945年7/31,8/2）など、多摩地域全域に空襲があった。1944.11.24の武蔵野市への空襲は、東京への初めての空襲だった（出典：総務省HP等）
- (\*7) 1945年8月2日の八王子空襲によって、約2時間で市域の80%が焦土となった。投下された焼夷弾1600トンは、東京大空襲時の量（1665トン）に匹敵する（出典：総務省HP）。